

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K14003

研究課題名（和文）異文化理解のための宗教教育：自己認識と他者への寛容性を高める授業モデルの開発

研究課題名（英文）Religious education for intercultural understanding: Exploring class models for fostering self-awareness and engaging with difference

研究代表者

DE LAKORDA・KAWASHIMA TINKA (Delakorda Kawashima, Tinka)

広島大学・人間社会科学研究科（教）・講師

研究者番号：30825873

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：日本の公立学校では、多様性を学ぶ教師が不足しているため、文化的・言語的に多様な（CLD）生徒への対応が困難な場合が多い。本研究では、宗教社会学における宗教性の指標を活用し、現職教員の宗教意識を高める体験学習のための効果的な授業モデルと教材を開発することに焦点を当てた。高校から大学までの様々な教育現場における対話活動の複数の評価に基づき、研究者は宗教的価値観に関する対話を含むワークブックを開発し、多様性と異文化コミュニケーションの教育者向けの指導マニュアルも作成した。研究の結果、宗教的・精神的な価値観や信念を自己認識することが、教師の文化的感受性にプラスの影響を与えることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の公立学校では、様々な宗教的ニーズを持つ児童の数が増加していることが課題となっている。多分野からなる本プロジェクトで開発された教授法と教材によって、教員は、宗教の違いを受け入れる異文化間対話を促すための自己認識とスキルを習得することができる。

研究成果の概要（英文）：Most public mainstream schools in Japan need help dealing with culturally and linguistically diverse (CLD) pupils due to a shortage of teachers trained in diversity. The research, drawing on religiosity measures in the sociology of religion, focused on developing an effective class model and teaching material for experiential learning, raising religious awareness among pre-service teachers. Based on multiple assessments of the interactive activities in various educational contexts from high school to university, the researcher developed a workbook containing dialogues on religious values, including an instruction manual for educators in diversity and intercultural communication. Study results showed that self-awareness of religious and spiritual values and beliefs could positively affect teachers' cultural sensitivity.

研究分野：Sociology of religion

キーワード：Intercultural education Religious awareness Teacher training Immigrant education Cultural sensitivity Teaching material Teaching strategies Cultural diversity

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

現在、外国人労働者などの増加により、外国にルーツを持つ児童・生徒も増加している。日本語の対応だけでも教育現場の負担が大きく、各児童・生徒の文化を考慮することは十分におこなわれていない。道徳教育が必修科されて以降、外国籍児童などへの対応に、教員はより客観的な価値観を持つ必要があると考えられる。しかしながら、道徳科を含む教員養成課程では、宗教・異文化理解に関する授業はおこなわれていない。

2. 研究の目的

上記の問題を解決するため、まず教員が、文化によって様々な価値観があることを認識する必要がある。現在、道徳教育を含めた全ての教員養成課程において、宗教や多文化理解に関する学習は必須となっていない。本研究によって、効率的な学習方法の一つのモデルを提案できると考える。

この状況を改善すべく、代表者は、アンケートとディスカッションを組み合わせた教育方法を学生・院生に試みた。その結果、学生各自の宗教観が明確となり、ディスカッションを通じ、他者の宗教観と比較することができた。本研究は、この手法を発展させ、自分と他者を理解し、他者を受け入れる学習方法の構築を目的とする。

3. 研究の方法

代表者は、教員が授業をおこなうのであるから、少なくとも、教員は授業の根幹となる自身の宗教観・信仰心・倫理観をある程度客観化しておく必要があると考える (Delakorda K 2019)。それは、一人でおこなうものではなく、他者とのディスカッションによって客観性が高まると考えられる。自身の宗教観を客観化するには、自分の社会的属性・行動様式などを確認することが必要である。同じ日本文化に所属していても、複数の宗教があり、多様な地域文化が存在する。大学では様々な地域から学生が集まっており、そうした違いを見つけることは容易である。

代表者がおこなったアンケートは、石井 (2010) から抜粋し、現在の多様な信仰の状況に合わせて修正を加えたものである。学部生、院生、教員へのアンケート調査、実験的なワークショップを通じ、効率的な学習モデルを開発する。派生的に、児童・生徒にも同様の効果がある学習モデルを開発し、教員各自が、自身の宗教観・価値観を客観的に認識することによって、教育現場での実践をおこなえるようにする。

4. 研究成果

多様な価値観を認識できる道徳・倫理教育は、平和な社会を築くために必要不可欠である。本研究は、児童・生徒が異なる価値観を認識し受け入れられるよう、教員はどのように支援すべきかという課題に注目した。近年の国際的・地域的な取り組みでは、単なる異文化についての知識の習得ではなく、紛争を解決し平和を創造する手段として、宗教間対話を重視する傾向がある (Keast 2007)。異文化間教育では、文化や価値観に関する対話を通じて、人種、文化、ジェンダーなどのステレオタイプを明らかにし、それを克服することが重要であ

る（EU Eurydice Network の指針）。本研究を通して、教育学部におけるアンケートをもとに、各学生の宗教観・信仰的行動を確認した。その結果からさらに、小人数グループでディスカッションをおこない、学生の他者意識にどのような変化が起こるかを観察した。

本研究でおこなったアンケートでは、主に、次の3点が明らかとなった（図を参照）。

1) 学生の宗教的意識はどの程度か？

代表者がおこなった調査を通じ、学生には宗教や信仰に関する知識がほとんどないことが判明した。一方で、ほぼ全員が宗教的といえるスピリチュアルな存在や現象を信じていたりする。したがって、学生たちは、自分たちの判断の根拠を明確化できていないといえる。

2) ディスカッションによって自己・他者の認識を整理できるか？

ディスカッションは、回答者の信仰・宗教観やそれについての意見を表現する機会となる。これまでに得られたコメントには、今回初めて自分の宗教や信仰について他者と話したという感想が多くみられた。この結果をみると、アンケートおよびディスカッションは、各自の宗教に関する知識・意識を整理し、他者との比較の基準を得ることができると思われる。

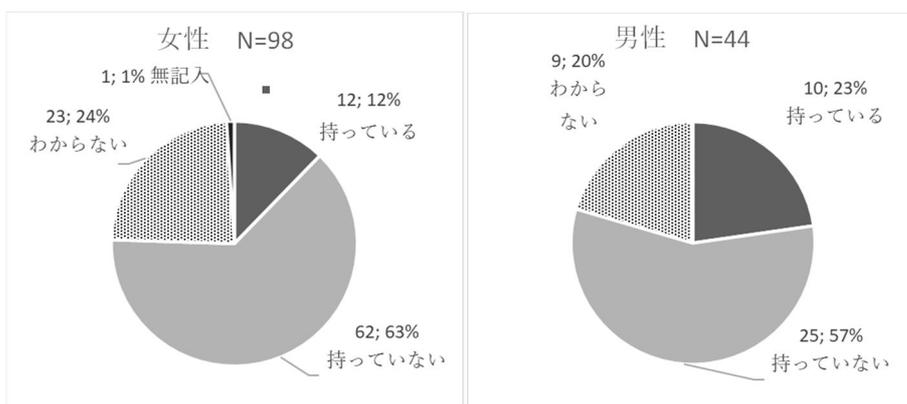
3) 学生は異なる信仰（または文化）を認識し、それを受け入れることができるか？

これまで、半数以上の学生は、グループ内での比較によって、宗教に関して自分と異なる経験・知識に接したことに驚いた、というコメントを残している。本調査の結果から、本研究で開発する授業の方法は、学生の意識変化に大きく影響すると考えられる。他者の認識を理解することによって、自分たちの思い込み（「自分の考えは普通」など）によって、他者を判断することが少なくなると思われる。

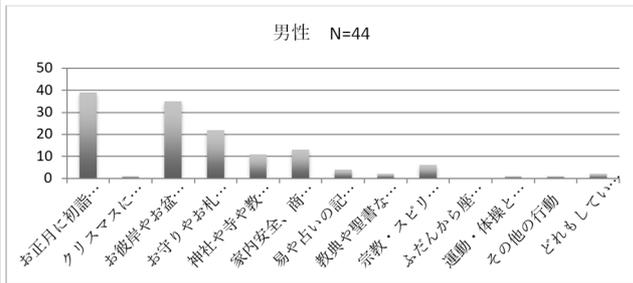
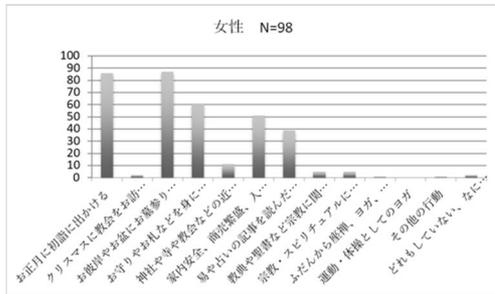
この調査は、典型的な海外の「異文化」に対して効果的なだけでなく、「日本文化」の中の差異の認識にも有効性を持つ。事実、代表者は日本人学生が主体の教室で、上記の効果をj確認している。現役の教員が参加する高校や大学院の授業でも、同様に認識を新たにできたという多数の意見が得られた。本アンケート調査を利用した学習は、様々なケースに対応可能であると考えられる。

アンケート結果の例

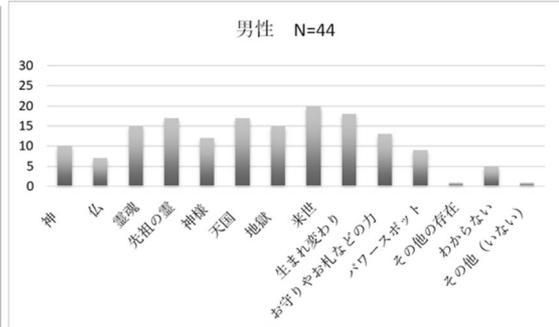
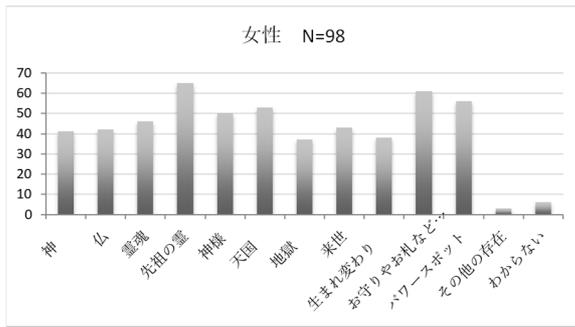
Q1. あなたは何か信仰とか信心を持っていますか（またはスピリチュアルなものを信じていますか）。



Q2. あなたが行なっているもの、幾つでもあげてください。



Q3.あなたは次にあげるものは存在すると思いますか。幾つでもあげてください。



本研究の結果は、宗教に関する調査・ディスカッションによって、各自の宗教観の意識化に繋がるだけでなく、他者の価値観をも意識できるようになることが明らかとなった (Delakorda K 2019, 2022)。教員養成課程において、このような宗教社会学的研究にもとづく自己反省的方法是、各自の民族的/文化的ルーツ・信仰・価値観など意識化することに役立ち、他文化理解能力を獲得するための一つのステップとして宗教の多様性を理解する際の手段となるだろう。

引用文献

Delakorda Kawashima, T. (2019) Teachers and Ethics: Developing religious self-awareness. *Bulletin of the Graduate School of Education, Hiroshima University*. Part 1, Learning and curriculum development (68), 91-97.

デラコルダ川島ティンカ (2022) 道德教育のための異文化間対話—宗教観に関する自己意識の重要性—, 『学校教育実践学研究』, 28, 69-73.

石井研士 (2010) 『データブック現代日本人の宗教』増補改訂版.

Keast, J. (2007) *Religious Diversity and Intercultural Education: A Reference Book for Schools* (Intercultural Education, Human Rights Education Series), Council of Europe.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 4件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Delakorda Kawashima Tinka	4. 巻 11
2. 論文標題 The Intangibility of the Intangible in Cross-cultural Contexts: Assessing the Value Gaps in Heritage Protection	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Interdisciplinary research in Human and Social Sciences (IFERI)	6. 最初と最後の頁 135-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15068/0002003295	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Delakorda Kawashima Tinka	4. 巻 28
2. 論文標題 Intercultural dialogues for multicultural education: On importance of religious self-awareness	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Hiroshima Journal of School Education	6. 最初と最後の頁 69-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hudson Mark, Uchiyama Junzo, Lindstrom Kati, Kawashima Takamune, Reader Ian, Kawashima Tinka Delakorda, Martin Daniele, Gillam J. Christoper, Gilaizeau Linda, Bausch Ilona R., Hoover Kara C.	4. 巻 9
2. 論文標題 Global processes of anthropogenesis characterise the early Anthropocene in the Japanese Islands	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Humanities and Social Sciences Communications	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1057/s41599-022-01094-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Delakorda Kawashima Tinka	4. 巻 10
2. 論文標題 The Relationless Japanese Society and the Practices of Belonging during the COVID-19 Pandemic	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Asian Studies	6. 最初と最後の頁 45～68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4312/as.2022.10.1.45-68	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Delakorda Kawashima Tinka	4. 巻 13
2. 論文標題 The Authenticity of the Hidden Christians' Villages in Nagasaki: Issues in Evaluation of Cultural Landscapes	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Sustainability	6. 最初と最後の頁 4387 ~ 4387
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/su13084387	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

[学会発表] 計4件(うち招待講演 2件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Delakorda Kawashima Tinka
2. 発表標題 Living with difference: A message from a CEDAR fellow
3. 学会等名 Webinar on "Living with Different Cultures" with Prof. Adam Seligman (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Delakorda Kawashima Tinka
2. 発表標題 "Brezvezna" japonska druzba in prakse pripadanja v casu pandemije
3. 学会等名 Online Symposium Vzhodna Azija: pandemija covid, etika globalnega humanizma in usoda kulturnih dediscin
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Delakorda Kawashima, Tinka
2. 発表標題 Kako povecati ucno uspesnost in studijske dosezke studentov: primer inovativnosti solskega sistema na Japonskem
3. 学会等名 INOUP Project's seminar on Innovative Learning and Teaching for Quality Careers of Graduates and Excellent Higher Education (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Delakorda Kawashima Tinka
2. 発表標題 「多文化共生に向けた教育・ワークショップの事例」
3. 学会等名 UNESCO Youth National Commission: 対話型・平和構築ワークショップ. 多文化共生社会の実現のために. 次世代ユネスコ国内委員会. (Education Workshops for Multicultural Coexistence) (招待講演)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 草原和博・吉田成章編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 108
3. 書名 「コロナ」から学校教育をリデザインする 公教育としての学校を捉える視点 (Redesigning School Education in a Post COVID-19 Pandemic World)	

1. 著者名 Rosker S. Jana	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Zbirka Studia Humanitatis Asiatica Ljubljana	5. 総ページ数 225
3. 書名 The covid-19 pandemic in Asia: traditional humanisms, modern alienation and the rhetorics of contemporary ideologies	

1. 著者名 Jana S. Rosker, Delakorda Kawashima Tinka, Andrej Bekes, Byoung Yoong Kang, Tea Sernelj, Tamara Ditrich, Klara Hrvatin, Nagisa Moritoki Skof, Mateja Petrovcic	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Znanstvena založba Filozofske fakultete	5. 総ページ数 228
3. 書名 Pandemija covid-19 v Aziji: tradicionalni humanizmi, moderna odtujenost in retorike sodobnih ideologij: slavnostni zbornik ob 25. obletnici ustanovitve Oddelka za azijske studije na Filozofski fakulteti Univerze v Ljubljani	

1. 著者名 デラコルダ川島ティンカ	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ニシキプリント	5. 総ページ数 20
3. 書名 ワークブック 自分の価値観をたしかめようー異文化理解のためのダイアローグー (Dialogues on religious values including an instruction manual for educators)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>加計高校、広島国泰寺高校、呉工業高等専門学校、などでの講演・ワークショップ</p> <p>オンライン講演会の実施 「違いとともに生きるために：CEDARでの学び」、異なる文化と生きるために アダム・セリグマン教授ウェブ講演会、多文化共生セミナー、広島大学ダイバーシティ研究センター、2021年3月8日（オンライン）https://youtu.be/JJqDZTjzt5g</p> <p>「多文化共生に向けた教育・ワークショップの事例」、対話型・平和構築ワークショップ;多文化共生社会の実現のために、次世代ユネスコ国内委員会、2023年01月22日（オンライン）</p> <p>G7広島サミットジュニア会議（高校生（日本人を含む、G7各国出身者8人）との交流）、広島サミット県民会議、https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/hiroshima-summit/junior-summit-final.html、2023年3月27日（広島大学）</p> <p>ワークブック『自分の価値観をたしかめよう 異文化理解のためのダイアログ 』（2023）</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------